東京藝術大学と愛。
その、らしさ、について。

藝える 6

藝大生らしさ・藝大らしさとは、
良い意味でいえば130年以上の本学の歴史が培ってきた「文化」です。
この芸術の学び舎で培われてきた、守るべきものと変えるべきものを身体感覚に基づいて
直感的に見きわめて自分にとって何か大切なことをやり遂げる集中力は、
未来が見えにくくなった時代を生き抜く生存戦略として
もっと評価されていいものではないでしょうか。

東京藝術大学広報誌『藝える』第6号

発行日
2020年3月24日

編集・発行
東京藝術大学『藝える』編集部

編集長
藤崎圭一郎

アートディレクション
有山達也

デザイン
中本ちはる（アリヤマデザインストア）

写真
冨田里美
（P8-13、P14左下、P15-16、P19-21、P32）

校閲
西村 knack 雅彦

編集
小林沙友里

事務局
東京藝術大学社会連携課

印刷
シナノパブリッシングプレス

素直。

アカデミック・バット・パンク。

いわゆる「コスパ」
（この言い方は個人的には嫌いですが）では
評価できない何か。

美術と音楽、西洋と東洋・
日本・非西洋地域、
伝統と革新が
混在していること。

時代に流されない、
普遍性を追求する姿勢、
若干世事に疎く、だまされやすい。

「勤勉」であること。
「エネルギッシュ」であること。
（良い意味で）「規格外」であること。

時流に乗ったり、安易に媚びたりしないところ。不器用でちょっと要領が悪いところ。

ものおじしない。
いい意味で
常識にとらわれない。

何にでも興味をもつところ。
何においても、周りが気がつかない価値を
見つけようとすること。
机上での思考に収めない姿勢。
現場に赴き観察すること。

限りなく
自由であり、
限りなく
ストイック。

自由を自身で
定める人たち。

生徒も教員も
対等に作家であること。

音楽を通して
誰でも
つながりあえること。

見切り発車と
着地力。

ごまめ。

あえて上野風に考えます。
「極端な自信とコンプレックスの裏腹な感じ」。
美校のファインアート系は
昔から進学校の落ちこぼれが多かったから。
昔から進学校の落ちこぼれが多かったから。
でも今はだいぶ違ってきたと思います。

群れない。
一人になりたい
寂しがり屋。

目に見えないものに対して敏感。

豆腐ともやしを
マーガリンで炒め、
ご飯の上にかけること。

内なる自分の
表現者。

あらゆる価値観が
共生しているところ。

編集部より

『藝える』編集部では、皆様からのご意見・ご感想などをお待ちしています。今号の内容についてのご感想や、今後のご要望などありましたら、こちらまでお寄せください。

〒110-8714　東京都台東区上野公園12-8
東京藝術大学内　『藝える』編集部
Fax：03-5685-7761
E-mail：toiawase@ml.geidai.ac.jp

馬鹿になれる。無駄なことをたくさんできる。

藝える

うえる

「藝える」は「　　」と読みます。本学では今年、東京藝大「I LOVE YOU」プロジェクト2020と題し、学生や教員による企画を支援して、芸術の無限の可能性を社会に発信する取り組みを行っています。今年このプロジェクトによって60件の藝大発のイベントや展覧会や演奏会などが開催されます。「I LOVE YOU」プロジェクトのキャッチコピーは「芸術は人を愛する」。それならと、本誌も「愛」を特集します。藝大を愛する人たちの温かい支援に感謝しながら、時に辛辣な声にも耳を傾けてみます。究極の藝大愛を求めて、明治の東京美術学校の時代から四代続いて藝大で学んだ六角家を訪れました。授業SANKANのテーマは身体性です。身体こそ創造性と主体性の源泉。そのことを証明するかのような愛にあふれる授業を見てきました。

藤崎圭一郎／美術学部デザイン科教授・本誌編集長

目次

特集

01 愛

02 東京藝術大学で働く人たちに聞きました「藝大生らしさ」「藝大らしさ」って何ですか？

08 ああ、愛すべし藝大らしさ！ 世界を変える濁った沼!? いや、創造の源泉

14 親子四代・六角家の「藝大愛」 つくって、育てて、美をつなぐ

20 高額寄附者の大いなる愛 ぐるなび滝久雄さんインタビュー

22 授業SANKAN 身体は裏切らない！編 1時間目＝体育　2時間目＝美術学部彫刻科 3時間目＝音楽学部邦楽科 日本舞踊専攻・能楽（宝生流）専攻

32 お知らせ

特集

「愛」

東京藝術大学で
働く人たちに
聞きました

「藝大生らしさ」
「藝大らしさ」
って何ですか？

本学の教員・事務職員のほぼ全員にアンケートを依頼し
160件あまりの回答の中から一部を選抜。
それぞれのまなざしから見えてくる藝大生・藝大像とは？
そこには愛ゆえのきびしい言葉も。

「藝大生らしさ」とは何だと考えますか？

個人主義、向上心、真剣さ、プライド。［音楽学部非常勤講師］

ものおじしない。いい意味で常識にとらわれない。［事務職員］

アイデアを自分の力で実現する（ただし、その方法は社会の非常識である場合あり……）。［事務職員］

浮世離れしているところ。のんびりしたところ。集中力が半端ないところ。［事務職員］

まじめでゆるい。［事務職員］

型にはまらないところ。はまっていられないところ。［事務職員］

実るほど、こうべを垂れる稲穂かな。だと思います。コンクールで賞などを勝ち取っても、傲ることなく、さっさと頭を切り替えて次に向かっていく姿勢だと思います。［音楽学部教授］

自らの情熱を注げるものを知ろうとし、そして打ち込む姿勢を当然にもっていること。［事務職員］

何にでも興味をもつところ。何においても、周りが気がつかない価値を見つけようとすること。机上での思考に収めない姿勢。現場に赴き観察すること。［美術学部特任教員］

自分が目指すものに向かって、専門性と人間性を磨いていく学生。［音楽学部非常勤講師］

一般常識にとらわれない自由な発想をもっている学生。そして「アートの奴隷」です。どこにもない「新しさ」をもっている表現ができる学生と考えます。［事務職員］

常識は選択肢のひとつであり、自分の選択は常に常識の外にあるという発想力。［国際芸術創造研究科教員］

裏側から世界を見ようとするところ。［美術学部助教］

自らを恃（たの）む。［保健管理センター教員］

自由の中にある秩序。［附属高校教諭］

「勤勉」であること。「エネルギッシュ」であること。（良い意味で）「規格外」であること。［音楽学部准教授］

徹頭徹尾芸術のことを考え続ける才人であり異能の人々。彼らはしばしば藝大の枠組みを超える。［大学美術館教員］

「お嬢様」「おぼっちゃま」or とんがってる。［事務職員］

全身クリエイティブであること。［美術学部教授］

臆病風に負けず自信をもって尖ること。［音楽学部非常勤講師］

未来を見る力と意志をつらぬく強さ。［美術学部准教授］

絵具がついた作業着で楽しそうに歩いてるところ。［美術学部准教授］

ごまめ。［映像研究科非常勤講師］

今という時代をあらゆる感覚を使い楽しむ、若者の集まり（一時期、混沌としていたが、この数年の学生を見ると振り切れ、再び藝大生らしくなってきていると思う）。［美術学部教授］

作業着で3Bの鉛筆一本持って講義を受けにくるイメージ。［美術学部准教授］

自由を自身で定める人たち。［COI拠点プロジェクト特任教員］

意外とマジメ。［音楽学部教授］

限りなく自由であり、限りなくストイック。［音楽学部特任教員］

自主的に何かを生み出す力をもつ者（作品だけとは限らない）。［美術学部准教授］

すぐに「形」・「音」を造れること。［美術学部教授］

一芸に秀でているというプライド、それ以外はダメでも結構許される。［音楽学部教育研究助手］

確実な基礎。伝統を網羅。次のステップへの常なる挑戦。強い行動力。［附属高校教諭］

「違和感があること→オイシイ」と変換しがち。［美術学部特任教員］

群れない。［事務職員］

未知なるものへの躊躇（ためら）いつつの関心と、ある種の自己中心性。［COI拠点プロジェクト特任助手］

内なる自分の表現者。［事務職員］

科学的根拠に基づかないこと。［美術学部非常勤講師］

気取らないこと。「藝大」というブランドなどどこ吹く風で、自分の表現に打ち込む姿。［音楽学部教育研究助手］

独立自尊。［美術学部教授］

そんなものはないんじゃないですか？［事務職員］

あらゆる好奇心。それを自らの肥やしとし、花を咲かせる夢をもつ。［音楽学部非常勤講師］

表現への想定外な執着（がんばりではない）。［美術学部教授］

馬鹿になれる。無駄なことをたくさんできる。［美術学部教授］

藝大生。卒業したらただのひと。［事務職員］

ぶっとんでてたくましい。［事務職員］

楽天的に自信過剰だけど憎めなくて魅力的。［美術研究科准教授］

自由奔放なようでいて、軸がしっかりしてまじめなところ。［美術学部非常勤講師］

何でもつくれる。［事務職員］

ダサかっこいいことに無自覚なこと。［美術学部特任教員］

あえて上野風に考えます。「極端な自信とコンプレックスの裏腹な感じ」。美校のファインアート系は昔から進学校の落ちこぼれが多かったから。でも今はだいぶ違ってきたと思います。［美術学部教授］

目に見えないものに対して敏感。［美術学部教育研究助手］

藝って、書けない？［事務職員］

素直。［美術学部非常勤講師］

アカデミック・バット・パンク。［美術学部教授］

自分が中心の宇宙をもつ若めのホモサピエンス。［音楽学部准教授］

やりたいことだけを、やれると信じて、やり続ける。［音楽学部非常勤講師］

藝大生だからって特別なことは何もないし括れない。［美術学部教育研究助手］

見切り発車と着地力。［美術学部非常勤講師］

良い意味で自分勝手。［大学本部特任教員］

音楽（芸術）に対してアカデミックなスタンスを取りながらも、オンリーワンを目指す。［音楽学部教授］

「自学自習・ゼロスタート・エネルギー」のセット。［美術学部教授］

子供のような好奇心をもち、「美しさ」を追求する。そのための知識や技術を獲得することに身も心も捧げる人たち。［音楽学部教授］

一人になりたい寂しがり屋。［美術学部非常勤講師］

「藝大らしさ」とは何だと考えますか？

寛容さ。［美術学部教育研究助手］

音楽・美術・映像と、領域を自由に横断して表現を考えることができること。［COI拠点プロジェクト特任教員］

枠に捉われない自由さ。［美術学部教育研究助手］

時代に流されない、普遍性を追求する姿勢、若干世事に疎く、だまされやすい。［事務職員］

各々が絶対的価値観をもつ芸術の専門家集団（このため、今の大学教育の枠組みから、はみ出してしまいます）。［事務職員］

ゆるさがゆるされる。［事務職員］

あらゆる価値観が共生しているところ。［事務職員］

最高峰と試行錯誤とが常に共存していること。［事務職員］

教員と学生という関係より、先輩としての教員、後輩としての学生という関係を感じられたとき、良い「藝大らしさ」を感じます。［美術学部特任教員］

日本と世界、人類と宇宙における唯一無二のパワースポットにして発信拠点。［音楽学部非常勤講師］

構内にゴミが落ちていないこと。一般の大学と違い大きな看板がないこと。［事務職員］

生徒も教員も対等に作家であること。［美術学部助教］

ガラパゴス。［保健管理センター教員］

秩序の中にある自由。［附属高校教諭］

（芸術界を牽引していく）「エネルギー」をもった大学、「憧れ」をもたれる魅力ある大学であることが「藝大らしさ」と感じてます。［音楽学部准教授］

「最後の秘境」的な奇天烈さに惑わされない、歴史に裏打ちされた本物のアカデミズムの探求。［大学美術館教員］

近代と現代が奇跡的に同居していること。［美術学部教授］

全てのコラボの機会を逃さない企画、作品、活動を生み出すこと。［音楽学部非常勤講師］

個性の尊重、異能への敬意。

［美術学部准教授］

いつもつくってる音がしてるところ。［美術学部准教授］

いい意味での時代錯誤。

［美術学部准教授］

派手に思われがちだけど、ストイック。［音楽学部教授］

学ぶ目的・目標を自分で設定できること。

［音楽学部特任教員］

個々人が集団／組織としての自分たちのありかたにあまり注意を払わないところ。それでも意思の疎通が互いにできるところ。

［美術学部准教授］

否定しないこと。［美術学部非常勤講師］

器が大きいこと（小さいことを気にしない存在であってほしいという希望）。［美術学部准教授］

〇〇バカの集まり。［美術学部教授］

個性の尊重＝ときには奇人・変人も容認するおおらかさ。［音楽学部教育研究助手］

不羈（ふき）、鷹揚（おうよう）。［映像研究科非常勤講師］

「藝大」らしくないことにチャレンジすること。

［美術学部教授］

必死じゃない。［事務職員］

時空を超えた幅広い芸術のサロン。［音楽学部非常勤講師］

社会に媚びない。

［芸術情報センター教育研究助手］

豆腐ともやしをマーガリンで炒め、ご飯の上にかけること。

［演奏藝術センター教員］

多様性、というかカオスであること（あらゆるものの母という意味でも）。［音楽学部非常勤講師］

藝大の歴史の中で知らず知らずのうちに継承されてきた、何事にも真摯に向き合い、本質を大事にするマインドではないかと思います。［大学美術館教員］

そんなものはないと思います。

［事務職員］

音楽を通して誰でもつながりあえること。

［音楽学部教育研究助手］

日本の移り変わりを芸術を通して見守り、また日本の将来を芸術を通して見通す存在であること。

［音楽学部教育研究助手］

事前段取りが不得手だが、最後には力業で何とかしてしまう。

［事務職員］

その時代その時代で、「世界の中の日本」のあるべき方向性を常に模索・表現し続けている存在であればと思う。［音楽学部准教授］

オーガナイズされないことから生み出される強さ。

［美術学部教授］

いわゆる「コスパ」（この言い方は個人的には嫌いですが）では評価できない何か。［事務職員］

「〜らしい」ということがないところ。［事務職員］

自主性・自発性・主体性優先。悪く言えばアメもムチもない緩いシステム。［音楽学部教授］

変化しないために何を変えるか、変化するために何を変えないか、の継続。

［美術学部准教授］

お金に余裕がないのに心に余裕はある。［事務職員］

歴史的研究機関。

［美術学部非常勤講師］

他と違うことが藝大らしさと思っているところ。

［事務職員］

時流に乗ったり、安易に媚びたりしないところ。不器用でちょっと要領が悪いところ。

［美術学部非常勤講師］

時間が止まっているところ。

［美術学部准教授］

西洋由来のアカデミズムを東洋思想で更新すること。

［美術学部特任教員］

論理的に矛盾していること。

［美術学部非常勤講師］

変人の集まり。

［音楽学部教育研究助手］

括（くく）らないこと。［美術学部教授］

世の中の常識や大人の都合でがんじがらめになんてならないところ。［音楽学部准教授］

良い意味で放ったらかし。

［大学本部特任教員］

既存の社会システムに自らを合わせる努力ではなく、より理想的なイメージを描ける、あるいはいち早くその構成員となることができる才能を見いだす力があること。［大学本部特任助教］

自らの感性や価値に自信をもっていること。それと同時に、他者の感性や価値観を尊重すること。

［美術学部教授］

美術と音楽、西洋と東洋・日本・非西洋地域、伝統と革新が混在していること。［音楽学部非常勤講師］

権威主義。

［美術学部教育研究助手］

多様な学生が卒業後、社会で活躍している国立大学と考えます。［事務職員］

さまざまなものが混ざらずに多様に同時に学内に存在しているところ。［事務職員］

国家権力の犬、あるいは猿か猫か狼。

［美術学部非常勤講師］

どんなイベントも藝大単独でこなせる。［事務職員］

故（ふる）きを温め、現代における革新と自由を表現しようとするところ。

［音楽学部教授］

「藝大上野校地にあるこれらの銅像、誰でしょう？
藝大愛があればわかるはず!?」

ああ、愛すべし藝大らしさ！世界を変える濁った沼!? いや、創造の源泉

藝大生らしさ・藝大らしさとは、良い意味でいえば130年以上の本学の歴史が培ってきた「文化」です。この芸術の学び舎で培われてきた、守るべきものと変えるべきものを身体感覚に基づいて直感的に見きわめて自分にとって何か大切なことをやり遂げる集中力は、未来が見えにくくなった時代を生き抜く生存戦略としてもっと評価されていいものではないでしょうか。いや〜、けっこうグデグデで褒めすぎもいかんのですが、その仮説を確かめるべく、本学のキーパーソンを取材しました。

文＝藤崎圭一郎

ここは沼だな。藝大に来てすぐそう思った。腰まで暗い水につかっていて足元が見えない。そろりそろりと足裏で底の様子を確かめて進んでいかないと深みにはまる。奥底には足を引っ張るカッパがいるかもしれない。

不肖藤崎、本誌編集長にしてデザイン科教授。藝大の常勤教員になってからこの4月で丸10年になる。私は藝大出身でも芸術系大学卒でもない。実技の授業や入試がどのように行われているかなどつゆ知らず、それが突然、教員全員藝大出身だったデザイン科に放り込まれ、周囲にとって当たり前のことがぜんぜん当たり前でなく戸惑うことばかり……。

そんな私がいつのまにか「藝大生らしい」とか「藝大らしい」という言葉を使うようになっていた。えっ、こんなんで大丈夫なの？と思わせながら、最後はきちんと仕上げてくる……結果オーライ、とはあえて言わず、底力と呼んでおこう。その力業が「藝大生らしい」「藝大らしい」と思ってみたりするのだが、だいたい「長男らしくしっかりしなさい」とか「社会人らしい身だしなみ」とかことごとく拒否して生きてきた身としては、「らしい」なんて言葉自体に反発がある。思わず自分が「藝大らしさ」なんて言ってしまうことに違和感を感じてきた。

いや、待て。でも、ここは沼だ。10年経ってやっと足元のデザイン科が見えてきただけで、本誌の編集をやってから取材で音楽学部や映像研究科のことをわずかにのぞき見することができるようになった程度だ。最後の秘境とまで世間で言われる、底の見えないこの組織には、なにかと世間一般と違うぶん、行き詰まり感があるこの社会を揺り動かし、未来を創造的に切り拓（ひら）くヒントが潜んでいるのではないだろうか。そんなことを考えて、まず美術学部長の日比野克彦教授に会いに行った。

「藝大らしさ？　かなり昔とは変わっている

と思うな。僕は1978年藝大デザイン科入学だけど、あの頃、世間の変化って激しかったですよね。今の10年20年の変化に比べて」

日比野氏は大学院在学中にアートとデザインの境界をまたぐ新世代のアーティストとして一躍時代の寵児になった。

「あの頃はニューヨークでキース・ヘリングやバスキアが登場してきたり、ニューペインティングと呼ばれる新しい絵画の潮流が台頭したり、西武百貨店の美術館がいち早く海外のトップアーティストの展覧会を開催して流

通と消費とアートが一丸になって動いていた。僕も大学院のときからそうしたなかで仕事をしていたから、藝大の杜が止まって見えたんだよね。藝大というのはアカデミックなものでぶっ壊す対象。仲間とグループをつくって活動して、これからの時代はオレたちが変えるんだぞって思ってた」

日比野氏が3年生のときに世界的に活躍していたグラフィックデザイナーの福田繁雄がデザイン科助教授に就任した。外部から第一線で活躍するデザイナーやイラストレーターを講師に招聘するなどデザイン科に新風を吹き込み、学生たちの信望を集めたが、わずか4年で退任する。「卒業式の日、福田さんが4月からいなくなるという噂が出て、学生数人とある教授に聞きに行ったんです。で、これは一生忘れないけど……『大学は学生のためにあるんじゃねえ、オマエらとっとと帰れ！』って言われたんです。えーっ、なんだぁ!?藝大って、となってね。それ以来しばらく藝大には行きませんでした」

日比野氏は95年にデザイン科助教授として藝大に戻り、99年からは新設された先端芸術表現科へ移る。あのときの言葉をひっくり返し「大学は学生のためにある」という思いを抱きながら、学生を学外に連れ出して芸術と社会をつなぐさまざまなプロジェクトに巻き込んできた。

で、今は美術学部長。「藝大の先生って各自専門性があるから、個々の特徴を尊重し合うところがある、いい意味で他者に左右されない。だけど近頃コンプライアンスやリスクマネジメントの影響か、現代の社会はどうすれば周りからの評価が得られるか的なことを気にしすぎているように見える。個人個人の

差異が芸術の力であり、藝大にはひとりひとりの人を生かす力があると信じています」

楽器を持てばきちんとする

次に会いに行ったのは、4月から音楽学部長に就任する杉本和寛教授。東京大学を卒業し、東大の助手を経て99年から藝大で教鞭を執っている。専門は日本近世文学だ。

「最初に驚いたのは学校にいる間、ふつうに音が流れていること。ヴァイオリンや歌声が

同時進行で。それとすべての黒板に五線譜が引いてあること。すごく書きにくい。僕は縦書きなんです。もう今は慣れましたけどね」

④

では当初、藝大生に対してどう感じたか？「馴れ馴れしいというか人なつっこいというか。廊下を歩いていたらお腹触ってきて、先生太った？とか言ってくる。でも、ふらふらしているように見える学生も、楽器を持つときちんとするんです。藝大生は学部の1年生のときから毎週一対一のレッスンを受けて、それは僕が大学院で研究者になるために論文指導を受けていたのと同じような時間の過ごし方です。彼らは加えて教養課程の学生がやることも同時にこなしていかないといけない。だから逆にいろんな面で少し抜け落ちているところがあってもなんか許せてしまうんだと思いますね」

講義ノートに書いたことを一方的に読み聞かせる講義は、藝大生の耳を素通りしていくが、手を動かさせたり考えさせたり何かをやらせると真面目に取り組むとも杉本氏は指摘する。これは座学の授業も受け持つ筆者も大いに同意するところ。そういえば本誌1号で取材した布施英利准教授の美術解剖学の授業は、講義しながら受講生に骨格とかノートに描かせていた。真似しようと思ったものだ。

⑤

杉本氏は続ける。「主体的に何かをやっていく能力は高い。美術学部のことはわかりませんが音楽学部の場合、大学に入ったときから人生で何をするかという目的が決まっている学生が多い。自分の専門に対して真面目にブレることなくやっている。そこは藝大生の愛すべきところだと思います」

ずっと前からアクティブラーニング

学生生活や就活をサポートする学生課の平尾祐子課長にも話を聞いた。平尾氏には学生が巻き込まれたトラブルなどに真摯に対応してもらい、いつも助けられている。教員とは違う学生への思いがあるのではないかと。

「私は文部科学省の初等中等教育局から2015年に藝大に来たのですが、ちょうどその頃、文科省では小中高大学にアクティブラーニングを導入する流れになっていました。ですが、手法は理解できても、それでどのような成果が上がるかはなかなか想像ができなかったんです。でも、ここの大学に来てみたら、それが当然のように、しかも上質なものが行われていて驚きました」

アクティブラーニングとは、学修者が受け身でなく能動的に学習に取り組む学習法のことである。「デザイン科の公開講評会を拝見したことがあるのですが、学生たちが自分たちで考えたものをどのように表現して発表していくかを時間をかけて考えていて、主体性があってすごいなあと思いました。他の学科

の作品講評などもそうですが、ここにはアクティブラーニングのひとつの完成形があるのかなあって。小学校や高校などで無理にやろうとすると、気づきがないまま調べ学習のプロセスに則ってやってしまい、最終的にアクティブだったのだろうか、ということになりがちなんです」

筆者はデザイン科の学部1年生対象に「調べる」と題する実技課題を行っている。荒川と利根川と多摩川のいずれかについて調べて、何か作品をつくれというもの。とにかく歩けと野に放つ。対話はするが教えすぎない。学生にやり遂げる力があるから、この大学では教えすぎないことが良い結果を生む。

⑥

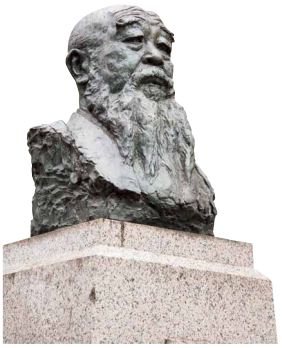
「音楽の学生もみんなでつくりあげることに懸ける情熱……熱量がすごいですね。集中力があって、困難なことでもやり遂げてしまう」と平尾氏。ただ心配事もあるという。「基礎的な知識が足りない学生が時々いるのが心配ですね。たとえば人権問題とか。そうした知識がないと今後社会を変えるような芸術活動をしていくには難しいかもしれない」

大浦食堂のマスターは見た！

さて、次は大浦食堂の店主、北澤悦雄氏（以下、マスターと呼ばせてもらいます）に話を聞いた。大浦食堂で働きはじめたのが1968（昭和43）年。マスターが明治大学法学部在学中、大学が学園紛争でロックアウトされて授業がなく、バイトに来たのがなれそめ。それから52年間、どの教員よりも長く、藝大生をカウンターの奥から見続けてきた。

⑦

⑧



「自分のいた大学とはぜんぜん違ってびっくりしましたよ。まず服装が怖い。美術学部の学生はバンカラで、つなぎの作業着を着てロン毛で無精ひげ。自由すぎるくらい汚い格好をしていて。以前は朝7時から営業していたので、朝まで飲んでた学生が食堂にへべれけになってやってきて、酒臭いわ、呂律（ろれつ）は回らないわ。だから音楽学部の女子学生は大浦食堂に来るのを怖がって、来るときは5人とか8人とか集団で来てましたからね」

どんな学生が印象に残っているかと問うと、「やたらうるさい学年は伸びています。飲み食い、遊び、イベント、運動とかなんでも顔を出す学年がね。彫刻科だと大巻（伸嗣）先生とか小谷（元彦）先生が一緒だった学年。それとタバコが吸えた頃はここでタバコを吸っていた連中が伸びましたね。他の科の子た

ちと交流して情報交換すると、自分の中からとは違ったインスピレーションが湧いてくるんでしょうね。あと、1～2年生のときはまったく見かけなかったのに、急に学校に来だす子も伸びますね。いつも食堂で見かけるようになるから『どうしてんの？』って聞くと『卒業制作が忙しくて学校じゃないとできないから来るようになった』とか言うんですよ」

いや～学生の成長を見つめる眼はまるで教員のよう。卒業して久々に食堂を訪れるとマスターに声かけられて、名前もちゃんと覚えてもらえていた、という話はよく耳にする。

9

で、藝大メシといえばバタ丼である。マーガリンで炒めた豆腐とモヤシをごはんにのせた丼物。バターじゃなくてマーガリンですよね？「ええ。昭和40年以前はアサリのバター蒸しとかみんなマーガリンですから。動物性より植物性のほうがいいんですよ。しつこさがない。バターでやったんじゃ乳臭さが口の中に残ってしまうんです」

10

かつては豆腐のバター焼きとライスは別々メニューだった。ゴハンにかけてくれという学生の注文があって丼に。バタドンという響きの良さも手伝って名物メニューになった。「65歳以上の人だと、たまに来てゴハンにかけないで別にしてくれよって言われますからね」。変わりつづける藝大だから、変わらないバタ丼の味は卒業生に愛されつづけている。

学長が語る藝大らしさ

そして最後は澤和樹学長。

「最近思わず『藝大らしいな』という言葉が出たのは、国立大学の運営費交付金の実績配分というのがあって、国立大学が3つのグループに分けられて、いろんな指標で評価されて交付金の配分が決められるのですが、藝大は自分たちが属するグループの中でどの指標も1、2位か最低のほうかという結果が出たんです。そのとき思わず、『藝大らしい』なって言ってしまった。得意分野とそうじゃないところが極端に出る。本学の学生もそういうところがある。みんな突出した才能があるけれども、普段の生活になると、ろくに人に挨拶もできず幼いなと思うようなところがあったり。どこか欠けているぶん、尖った才能が育つのかなと思う。そのあたりも藝大生らしさというか」

11

他にもありますか、藝大らしさは？

「藝大らしさの真逆のものとしてということ

で思いつくのはセンター試験の試験官かな」。藝大も大学入試センター試験の会場となり、教員たちは試験官を務めないとならない。ミスがあってはならないと早朝から夕刻まで教員にも事務職員にも極度の緊張が走る。

「学長として当日の朝、試験官をやる先生方の前でこう挨拶するんです。『普段の芸術的な創造の力というのを今日だけは封じ込めて、ひたすらマニュアル通りに一言一句間違わずにやってください』と。自分も数年前まで試験官をやっていましたが、マニュアル通りにと言われていても、書いてあること以外をしゃべりたくなる自分を封じ込めるのがけっこう大変でした。最近は働き方改革のことが話題になりますが、決まった時間が来たらやめて帰りなさいというようなことも芸術をやる人とは真逆ですよね。とはいえ大学の運営においては働き方改革はやらないといけない。そういうジレンマを感じています」

⑫

⑬

そういえば前出の平尾学生課長から「藝大には『文字の文化』がないと言われている」と聞いた。「文字として書かれている規則に立ち戻って考えようとはしないで、こういう感じでいけばいいと感性で動いてしまう」と。それは筆者も教員として何度も経験してきた。後から面倒が起こることもあるのだが、藝大のある種の居心地の良さにもつながっているとも思っている。本誌『藝える』も規則とか契約書とか一切ないし。

で、最後に学長に問うた。藝大を愛していますか？

「ええ、溺愛（できあい）していると思います。最近藝大愛が高じてお墓まで寛永寺に移しちゃいましたから。草葉の陰から応援できるように」

この沼は愛に満ちている。でも、きっとそれは藝大愛だけじゃない、芸術愛。それがやり遂げる力や熱量になって、濁った沼を創造の泉に変える。この愛の沼に溺（おぼ）れるもよし。

①岡倉天心（1862～1913年）美術史家・教育者。1931年、平櫛田中作。
②香取秀真（1874～1954年）鋳金家。1955年、平櫛田中／菅原安男作。
③伊沢修二（1851～1917年）音楽教育家。1930年、長谷川義起作。
④加納夏雄（1833～1898年）彫金家。1910年、米原雲海作。
⑤安井曾太郎（1888～1955年）洋画家。1960年、石井鶴三作。
⑥白山松哉（1853～1923年）漆芸家。1929年、水谷鉄也作。
⑦小山作之助（1863～1927年）作曲家。1929年、長谷川義起作。
⑧高村光雲（1852～1934年）彫刻家。1935年、高村光太郎作。
⑨石川光明（1852～1913年）彫刻家。1917年、朝倉文夫作。
⑩川端玉章（1842～1913年）四条派の画家。1911年、武石弘三郎作。
⑪寺崎広業（1866～1919年）日本画家。1937年、内藤伸作。
⑫竹内久一（1857～1916年）彫刻家。1930年、沼田一雅作。
⑬橋本雅邦（1835～1908年）狩野派の画家。1913年、白井雨山作。

親子四代・六角家の「藝大愛」

つくって、育てて、美をつなぐ

二代

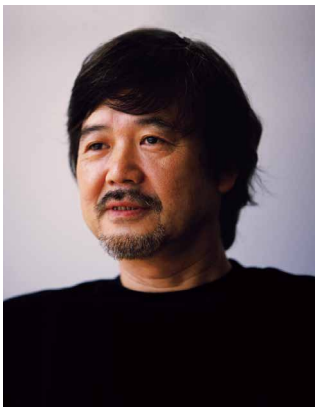
六角 大壌
だいじょう

一代

六角 紫水
しすい

四代

六角 美瑠
みる



三代

六角 鬼丈
きじょう

東京美術学校設立に始まる藝大の130余年の歴史と伝統。
その流れに寄り添ってきた家族があります。
初代は岡倉天心に学び、
二代目は漆芸家として技を極め、
三代目、四代目は建築家として才を発揮。
創作者としてたゆまぬ努力を重ねながら、
場と人に親しみ、芸術に邁進する一家の物語です。

文＝大谷道子

六角紫水 ろっかく・しすい

1867（慶応3）年生。幼名は仲太郎。古社寺や文化財の調査・保護、漆の古典技法の洗練にもいそしみ、漆芸の温故知新を一代で成した先駆者。1950年没。

紫水氏の現存する著名な作品のひとつが、キリンビールの麒麟のマーク。絶妙な色味の塗りの上にモダンな植物柄を描いた《芭蕉丸盆》の素地は、なんとアルミ。晩年も作風は進化を続けた。

「家風」という言葉は、今ではもう死語だろうか。でも、どの家庭にもその家で大切に受け継がれる習慣や、貫かれる流儀がある。

教育は、その最たるものかもしれない。ある分野を極めること、また、ある学校の校風を愛すること。それが代々続くというのも、家風のひとつだろう。われらが東京藝術大学にも、もしかしてそんな家族が？と探してみたところ、見つかりました。それは「六角家」。なんと、四代続いて藝大に学んだ、筋金入りの芸術一家である。

「テーマは『藝大愛』？うわぁ、大きなテーマですね。大丈夫かな」

明るい笑顔で迎えてくれたのは、六角美瑠さん。数々の建造物を手がけつつ、芝浦工業大学や東京大学生産技術研究所で教鞭を執る建築家であるこの方が、六角家で藝大に学んだ〝四代目〟。三代目は、同じく建築家だった彼女の父で、1991年から2009年まで藝大美術学部建築科教授、04年からは美術学部長を兼任した六角鬼丈である。氏は昨年、惜しまれつつ逝去。その位牌が一隅で見守る自宅リビングには、早春の柔らかな光が差し込んでいた。

パイオニアとなった「婿養子」師弟

元は藤原北家日野氏流に連なる公家で、江戸時代は儀式や典礼を司る高家（こうけ）旗本だった六角家。この家から1887（明治20）年、開校したばかりの藝大美術学部前身・東京美術学校に入学したのが、美瑠さんの曽祖父で漆芸家の六角紫水だった。岡倉天心の直弟子ともいえる、記念すべき一期生である。

「紫水は広島の能美（のうみ）島の農家の生まれ。新聞で東京美術学校が設立されることを知り、上京して徳川家御用絵師の狩野友信に学び、受験したそうです。卒業を機に、友信の勧めで六角家に婿入りすることになります」

同級生には横山大観や下村観山といった日本美術界の大スターがずらり。その中で手先の器用さを買われた紫水は、天心の声がけで

新設された漆芸科に転科し、そこでさまざまな新しい取り組みに挑戦する。

「天心とともに渡米し、西洋塗料の研究を行った際、逆に漆の優秀性を再認識したそうです。その後、白漆の開発を手がけ、漆では出せなかった鮮やかな色彩の色漆をつくり出しました。万年筆からピアノ、自動車や鉄橋まで弟子たちと漆で塗り歩いたそうです。国宝認定に全国を巡り、明治時代初期に神仏分離令で木地になっていた厳島神社の鳥居を朱色に戻したのも、紫水なんですよ」(美瑠さん)

ええー！　勤勉かつ進取の気性に富んでいた紫水は〝先んずれば人を制す〟がモットー。アルマイトのような新素材の利用や古代中国でつくられた楽浪漆器の研究を行うなど、漆の可能性を広く見いだそうとしていたという。

美瑠さんの母で鬼丈の妻である喜久子さんが六角家に嫁いだときは、鬼丈の父である義父・六角大壌が健在だった。実は、この大壌も婿養子。紫水の嗣子であった長男が早世したため、ふたりの娘のうち次女の婿として白羽の矢が立ったのが、紫水のもと藝大で学んでいた大壌だったのだ。

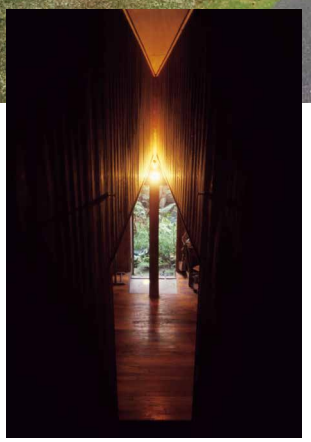
「大壌の父親は漢学者でした。大勢兄弟がいた中でいちばんいいのをもっていかれた、と怒っていたそうですよ(笑)。義母の花亥(はんい)は女子美で日本画を学んでいて、藝大に行きたかったそうですが、当時は男性しか入れなかった。今の時代なら、きっと義母が二代目として継いでいたでしょうね」(喜久子さん)

乾漆造(かんしつぞう)(麻布や和紙を漆で張り合わせたり、木粉(もくふん)と漆を混ぜたものを盛ったりして成形する技法)で独特の空間感覚あふれる作品を生み出していた大壌は「漆芸家でありながら、建築的な視点をもっていたと思います。乾漆

生前の鬼丈が父・大壌の作品でもっとも印象に残っていると語った《檜螺旋初雪蝶盆》。薄く削ったヒノキ材を螺旋状に巻いてつくった木地は、強靭でありつつ、どこまでも優美なフォルム。

六角大壌 ろっかく・だいじょう

1913(大正2)年生。本名は穎雄(ひでお)。47年に東京美術学校の教員となり、のちに藝大教授。人間国宝・増村紀一郎氏など多くの漆芸家を指導した。73年没。



上：自由な創作の場として設計された《東京藝術大学大学美術館取手館》。現在は、収蔵庫として機能している（非公開）。左：木の温もりと神聖な空気が合体した《クレバスの家》の内部。

六角鬼丈 ろっかく・きじょう

1941（昭和16）年生。本名は正廣（まさひろ）。《東京武道館》で日本建築学会賞を受賞。藝大退任後は中国・北京の中央美術学院へ赴き、多くの学生を育てた。

作品の一体化したフォルムと奥行きのある塗りの表現は、豊かな空間を内包しているように感じます」と美瑠さん。螺鈿（らでん）や蒔絵（まきえ）などの伝統的な漆の装飾美を実践しながらも、民藝運動勃興期に合わせて、いわゆるクラフトの概念を漆芸に導入し、漆をより人の暮らしに近づけようと試みた。

革新の三代目、教育にも情熱を

制作と同じく力を注いでいたのが、後進の育成。紫水に続いて工芸科の教授となった大壌は、酒好きで人好き、学生の面倒をよく見るよき教育者でもあったという。

「藝大生が来るのはしょっちゅう。お正月にもなると20～30人も来て、お酒を飲んでは朝までゴロ寝して……。朝起きるとどこからか持ってきたバス停看板があったり、どこかの店の暖簾が軒にかけてあったりして」とは、往時を知る喜久子さんの言。「ひとりっ子の父にとっては、兄貴分みたいなお弟子さんや藝大生が周りにいつもいて、刺激を受けていたみたいです」と、美瑠さんも語る。

そんな六角家に一大変革の波が立ったのは、

美瑠さんが修士時代に設計した別荘《ORU》。鋭角のフォルムには、若き日の鬼丈が設計した《クレバスの家》の面影が。「同年代の頃の父と肩を並べたい気持ちもあったのかもしれません」

六角美瑠 ろっかく・みる

1977（昭和52）年生。東京藝術大学大学院修了、東京大学工学系研究科博士号取得。現在は工具店「シーフォースビル」（台東区御徒町）の設計や鬼丈最後の設計作品《弁天堂》（群馬県邑楽郡）に取り組んでいる。

三代目のとき。初代から受け継がれてきた漆芸ではなく、鬼丈が志したのは建築だった。

「もともとはグラフィックや車のデザインに興味をもっていたそうですが、予備校時代、父の机の上に大壌が置いた一冊の建築雑誌を目にしたことがきっかけだったようです」（美瑠さん）

若き鬼丈の心を決めさせたのは、予備校に指導に来ていた建築家・宮脇檀との出会いだった。宮脇の東北視察旅行に、当時浪人生だった鬼丈は、運転助手として半年間同行。そのときの体験で思いを定め、結局そのまま建築科を受験し、藝大に進んだ。

吉田五十八賞を受賞した《雑創の森学園プレイスクール》（77年）、代表作の《東京武道館》（90年）など、一度見れば容易に忘れがたいインパクトと機能美、哲学性を秘めた鬼丈の作品世界。その原点が、自宅敷地内に新婚夫婦の、つまり自身と喜久子さんのための家として建てた《クレバスの家》（67年）だった。

これもまた、衝撃的。こぢんまりと瀟洒な家の玄関のドアを開けると、目の前にいきなりドンと大黒柱が姿を現す。ユニークといえばユニーク、「何これ？」といえばナニコレな家（すみません）なのだが、喜久子さんは建築中から「ワクワクしながら眺めていた」というのだから、さすが、さすが。

「建築途中の木軸組の立ち姿が、家というより美しい船みたいで、素晴らしかったです。お金がなかったから安普請で、冬は隙間風だらけで寒かったけど（笑）」

この家で育ったふたりの娘のうち、長女の安以さんはテキスタイルと陶芸を、次女の美瑠さんは父と同じ建築を志すことになる。小学生の頃に見て胸に刻まれた《東京武道館》の華やかな記憶はもちろん、美瑠さんにとっては、やはり生家で体感した空間というもの、その奥深さへの憧れが出発点であるという。

「もちろん住宅ですから、テレビなど生活品があり、日常の風景があります。ですが、『クレバス』と名付けられた裂け目のような階段

空間に目を向けると、生活感は意識から消え、深い奥行きのなかに引き込まれる。そのような力強い空間構成を建築内部に仕掛けることに魅力を感じ、設計への憧れをもつようになったのだと思います」（美瑠さん）

同志として、時代を超えて

他大学で建築を学び、大学院で藝大建築科へ。修了後には同科で教育研究助手も務めた美瑠さんが学内で目の当たりにしたのは、エネルギッシュな教育者としての父の姿だった。「学部長だった頃、鬼丈は自ら美術学部の全科を回り、学びの環境についてインタビューしていました。藝大は縦割りが強くて横のつながりが少ない、もう少し他科との連関があってもいいんじゃないかと言って。大石膏室で大討論会を行ったときは、教員も学生も集まって大変な盛り上がりでした。さらに芸術でまちづくりをという理念のもと、全科協力して藝大界隈の街中に作品を仕掛ける『タウンアート』という試みも興しました。藝大が力を合わせればできるんだと、楽しそうに」

同じ学び舎で、芸術を志す者同士の交流を、もっと。その願いと働きかけがもっとも象徴的なかたちで表れたのが、取手校地にある《東京藝術大学大学美術館取手館》（94年）ではないだろうか。鬼丈が設計したこの美術館の随所には、当時現職の美術学部各教員の作品が、展示ではなく「設置」されている。教員たちがつくり、デザインしたドアノブが、配管が、便器（！）までもが、実際に見て、触れて、使うことまでできるのだ。

「『藝大らしさ』を建築として見せるのではなく、他科の教員作品と共に環境としてつくりあげたいと話していました」と美瑠さん。鬼丈は建築家ならではのプロデュース能力と、人を動かす天賦の才を発揮し、ひとりひとりを説得。結果、「建築を実験の場に」という理想の実現に結びつけた。その行動の源泉にあるものを、「愛」と呼ばずして何と呼ぼう？

「やはり藝大は、つくり手同士という感覚が強いと思います。父とも、私が建築を学び始めてから、やっと向き合って話せるようになったような。ものづくりを通して対話できる関係になれたことが嬉しかったですね。私に四代目という役割があるとするならば、先人の思想や活動を後世にいかに伝えることができるかということが課題かもしれません」（美瑠さん）

時が流れ、人は去っても、作品は残る。向き合えば、そこに息づく精神と、いつでも対話できる。その作品を、場を生み出したのは、才能と技を磨き、哲学と道徳を尊び、縦にも横にも友好を広げ一生を創作という冒険に捧げた一家に脈々と流れる、芸術への愛と情熱。ひとつの作品に永遠の精神が宿るように、六角家の藝大愛もまた永遠なのだ。

喜久子さん（写真左）の姉で美瑠さん（右）の伯母の村上美奈子さんも建築家。藝大で鬼丈と同級生だった村上さんが、ふたりの間を取り持った。

高額寄附者の大いなる愛

ぐるなび 滝久雄さんインタビュー

ぐるなびの会長がなぜ藝大に？
そこには鉄道に始まり
国際交流にまで及ぶ
壮大な想いがありました。

金工作家の宮田亮平前学長・文化庁長官作の銅鑼。滝さんがたたくと、ドワァァァンとフロア中に轟音が。

この桁数、間違ってないよね――2017年、『藝える』1号巻末の寄附者一覧を編集していた筆者は、その桁を何度か数え、結局、漢字入りの表記にした。「10億500万円」。その傍らには「滝久雄」の名が。あのグルメ情報サイト「ぐるなび」の創業者・会長として知られる滝久雄さんだ。国際交流施設の建設資金として寄附されたとのことだが、なぜ藝大に？　なぜそんな高額を？　その理由を尋ねに、満を持してぐるなび本社を訪れた。

鉄道からパブリックアートへ

日比谷の一等地に位置するぐるなび本社の応接フロアには、野見山暁治名誉教授、日比野克彦美術学部長ら、藝大でおなじみの先生方が手がけたステンドグラスが設置されている。「もう540点以上になりますよ」とにこやかに話すのは滝さん。日本交通文化協会の理事・理事長として、1972年から全国の駅をはじめ、空港や商業施設、公園などに数多のパブリックアートを設置してきた。その動機は何だったのだろうか。

「明治以降、日本が世界に伍すようになった

文＝小林沙友里

原点は鉄道だと思います。現在東京とその周辺だけで線路が２０００㎞、駅が１０００あって、ほぼ正確に定時運行している。これを基に日本のさまざまなモラルが確立されたわけです」。確かに外食産業における安全な食材調達も、その正確さと関係していそうだ。

「また、駅は街のコミュニティのベースにもなっていますから、待ち合わせのモニュメントとして、半永久的に残るステンドグラスや陶板レリーフを日本の代表的アーティストに制作してもらい、設置しています。その周りに良い広告をつければ収益になりますしね」

社会の価値基準を変えうる芸術

滝さんは、公共建築費の１％をその建築物に関連する芸術のために使う「１％フォー・アート」法制化を求める活動にも取り組む。

「戦後日本が追求してきた経済発展第一主義が行き詰まり、ＩＴのアルゴリズムに振り回されているなか、新しい国づくりの中心に据えるべきは文化・芸術だと思っています。文化・芸術にはこれまでの論理中心の社会に感性や美的感覚といった新しいものさしを導入し、価値基準を変える力がありますから」

滝さんが藝大に期待することは何だろうか。

「日本における文化・芸術を中心としたリベラルアーツの教育・研究機関の中核として、他の大学をリードしてほしいですね。また、国内外に誇る幾多のアーティストを輩出してきた人材の宝庫として、産業とも積極的に連携し、国際的に存在感を高めてほしいと思います。あと、ぜひ留学生を大事にしてほしい」

ぐるなび本社の応接フロアに2011年に設置された、日比野克彦教授作のステンドグラス作品《STAIRS》。

滝 久雄
たき・ひさお

1940年生まれ。東京工業大学理工学部機械工学科卒業。三菱金属（現三菱マテリアル）を経て、父が創業した交通文化事業社（現エヌケービー）を継承。96年、「ぐるなび」創設。2010年より本学の経営協議会委員。

留学生と街ぐるみで交流を

若い頃、米国視察で起業のヒントを得た滝さんは、日本の観光産業の可能性にも着目し、かねてより、日本に来た留学生を大事にすべきだと口にしてきた。

「日本は平和ボケしているとも言われますが、美味しいものが世界一集まる、住みやすい国。街ぐるみで留学生を歓待し、交流して日本の良さを感じてもらえれば、帰国後に広めてくれます。彼らが自国でトップになった時、日本を大切な国として考えてくれるでしょう。留学生を大事にすることは安全保障なのです」

藝大の国際交流施設は２０２１年、上野キャンパスの大学会館の一部を解体してその跡地に完成予定。キャンパスグランドデザイン推進室と隈研吾建築都市設計事務所によって設計される。そこにはもちろん、アート作品が設置される予定だ。芸術愛にあふれる滝さんが藝大に授けたこのサロンは、国際的な芸術談議、そして友愛を育む場になるだろう。

体育

1時間目 体育 「芸術家もカラダが資本」

オリンピックイヤーでございますよ、皆さま。「でも、藝大は関係ないでしょ?」。そんなことはありません。そりゃあ、飛んだり跳ねたり走ったりはしませんが、芸術家だって毎日、技を磨き、身体のあちこちを鍛えているんです。

実際、体育の授業だってあるんですよ、という耳寄りな話を聞いて向かったのは、上野校地の最果てに位置する体育館。肋木(ろくぼく)あり、跳び箱ありのクラシックな設(しつら)えの一隅に、んん? なにやら見慣れない「輪っか」がいくつも……。これは、ラート(ボール、と同じイントネーション)。円形の鉄パイプを平行に2つつないだ輪の中に入ってくるくると回ったり、上に乗ったりしながら演技する、ドイツ発祥の運動器具だという。

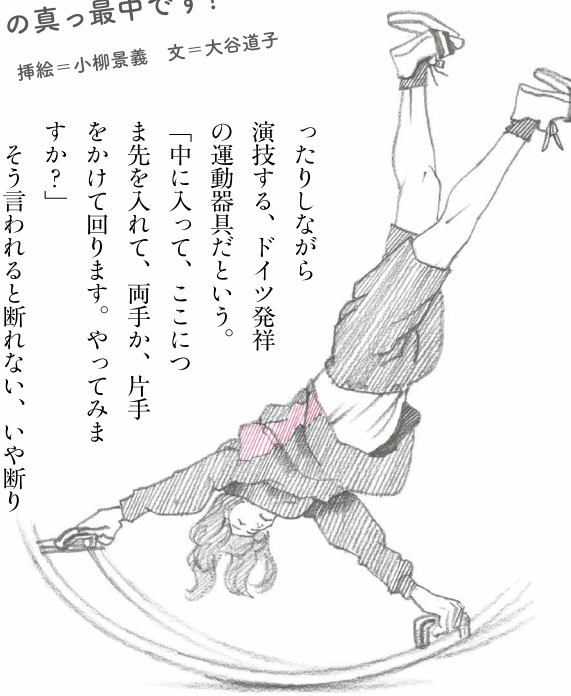
笑顔も爽やかな世界王者の髙橋先生。今年1月の全日本大会でも直転・跳躍・斜転各部門を制し、総合優勝V8を達成!

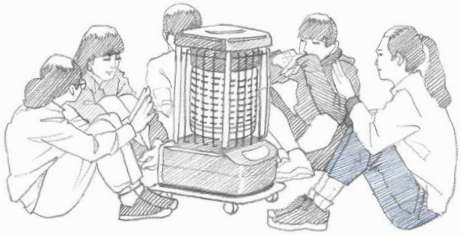
「中に入って、ここにつま先を入れて、両手か、片手をかけて回ります。やってみますか?」

そう言われると断れない、いや断りたくないのが、我ら『藝える』取材班。つま先を入れて、手を……わ、わ、回る! 身体も回るが目も回る! どこ見ていいかわからない!!

「基本的には正面を見ていただければ大丈夫です。あ、もう1周回りますか? (単に止まれない取材者O)大丈夫大丈夫。僕、これまで何千人も乗せてきましたけど、落っこちた人はいないです」

ふぅー(冷や汗)。しかし、乗ってみるとラート、愉快な以上になかなか気持ちがいいのです。四肢を外側に引っ張られる絶妙なストレッチ感とともに、ぐるりと回って血が巡り、なんというか、全身が活気づく不思議な爽快





授業SANKAN

身体は裏切らない!編

美を形づくる。美を表現する。それが、芸術家の身体性。
藝大は毎日、「美のオリンピック」の真っ最中です!

挿絵=小柳景義　文=大谷道子

感。指導する髙橋靖彦先生は、藝大に非常勤講師として勤務しながら活動する現役ラート選手。というか、全日本選手権8連覇、世界選手権優勝3回という、トップ中のトップアスリートなのだ。

「オリンピック競技に？　なったらいいですねぇ。もとは野球をやっていたんですが、怪我をしてしまい教師になろうと入った体操部でラートに出合いました。2018年から教えていますが、藝大の子は反応が素直。それに、競技のことをちゃんと理解しながら取り組んでくれるのがいいですね」

この日、集まった学生は男子2名、女子6名。美術学部、音楽学部、それぞれ専攻もバラバラで、教職過程のために履修する学生もいれば、「身体を動かしたいから」と進んで選択した学生もいる。ウォーミングアップののち、それぞれ身体のサイズにあったラートを選び、くるくると回転。基本の側転は、おお、よく見ればレオナルド・ダ・ヴィンチのウィトルウィウス的人体図の趣が。大騒ぎしていた中年たち（＝取材班）と違ってごく落ち着いた様子で乗りこなしていく。

「普段、身体を動かすことは……ないですね（笑）。だから、週の終わりの体育が楽しみ。楽しく1週間を終えられるので」（美術学部工芸科）

「普段は腕の外側をおもに使いますが、ラートでは内側の筋肉も使うんです。そういえば、やり始めてから演奏のときの姿勢がよくなったと言われました」（音楽学部器楽科ピアノ専攻）

身体を縦にして回ったり、2人でシーソーのように動かしたり。授業の最後には、数人で1台のラートを観覧車のように操るなどの技巧も見せる。自分で自分の回り方をデザインするラートは、美的感覚や創作力も問われるスポーツ。なんとも、藝大向きではないか。

「学内にサークルもあって、出身の子がインカレで優勝したこともありますよ。美術も音楽も、結局は身体が資本ですから、自分の身体を意識して、きちんと使えるようになることはすごく大事。ここで身につけた感覚が、日々の制作や表現にも生きてくれればと思いますね」と、髙橋先生。自身の競技で使う衣装や音楽を、学生とコラボレーションする計画もあるのだとか。ともあれ、名物授業になるまで、回れ、回れ、学生たちよ。でも、くれぐれも指は大事にね！

2時間目 「ほしいものはその手でつくれ」

美術学部彫刻科

さて、美術学部でもっとも「身体が資本」となる科といえば？　ここは直感に頼り、大きいもの、重たいものを扱う科を選んでみた。訪れたのは、彫刻科。石、木、金属、粘土（テラコッタ）の4素材を使った作品制作を行うこの科には「絵はうまくなくても、とにかく『何かつくりたい！』という子が入ってきます」と、林武史教授は言う。

「手でものを触って、つくる喜びを実感したいという学生が多いです。彫刻は、じっと見ててもつくれない。見る時間も必要だけど、手や身体を動かさない限り、脳も動かないので。熱いとか冷たいとか重たいとか、いろんな感覚を身体に取り入れて、身体のどこかが痛くなるほど疲れるしんどさを感じながら出来上がってくるものだから」

道具の安全な扱い方を覚えるのは彫刻家への第一歩。ノミ、カンナなどの刃物は、研ぎ方から徹底的に。アトリエの一隅には鍛冶場も。

彫刻

訪問した昨年11月末、彫刻科は学部2年生の「選択実習」の佳境。1年から2年前期に4素材の扱い方を学び、うち1つの素材を選択して迎えた後期の8週間、学生たちは、おそらく自身初となるであろう本格的な作品制作に取り組んでいた。「たとえば、ミケランジェロの彫刻に憧れたとしたら、今の時点で一度はミケランジェロに挑戦しておきたい！　とかね」（林教授）。学部前半2年の総決算、進級をかけたその作品は、年明けの成果展で披露される。

アトリエ訪問は、テラコッタのゾーンから。広い部屋のあちこちに、所狭しと作品が並んでいる。まず目を引いたのは、アンティーク調のソファに大きな裸の女性が横たわる迫力の一作。ソファは実際の家具、人物はテラコッタ製だ。

「これは、イギリスの画家、ルシアン・フロイドの絵をもとにした作品。ソファのサイズに合わせて人物像をつくるんですが、テラコッタは焼くと10から15パーセント縮みます。それを見越して、ちょうどいい大きさにするのが難しい」

解説は、自身もテラコッタで人物像の傑作を数々生み出してきた北郷悟教授。優雅なカーブを描いた背中が特徴的な一対の裸婦像は、自身の脊柱側彎症をモチーフにした学生の自画像ならぬ自刻像。その横にある黒く大きな塊、横顔の石像のようでもありどことなく繭のようでもある作品には、小柄な学生が果敢に挑んでいる。

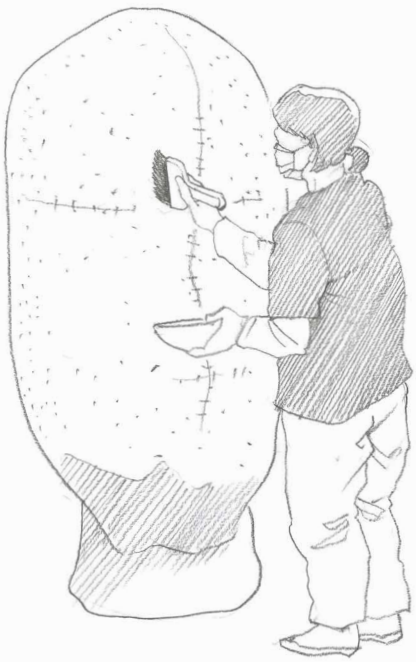
フロア中央に、巨大な女性の頭像を発見。エナジーあふれるこの像は、アメリカのジャズシンガー、ニーナ・シモンがモデルだという。これだけ大きなものを粘土で成形し焼くとなると、当然「割れますね。割れるというか、爆発する」。爆発！

「でも、そのことも表現のひとつにすればいいんですよ」と北郷教授。よく見ると、像の表面には無数の指の痕が。しかし、それが像に生の実感を与えているようにも思える。

「私の葛藤の痕（あと）です。いちばん苦しんだところが手数が多くなって、爆発しやすくなる。でもそれは内包するエネルギーが出た証しだから、受け入れるしかないのかな」と、制作者の許斐（このみ）真帆さん。葛藤も対象への愛の証しなのだ。

次に向かったのは、木彫の部屋。藝大の前身、東京美術学校設立時の3科（日本画、金工・漆芸、木彫）から続く、いわば彫刻科のオリジン。伝統の工房は、かぐわしい木の香りに満ちていた。

しかしまあ、どれも大きい。実物よりはるかに大きな馬の像に、堂々とした仏の立像。奥にある



細長い人物像は、進級展に向けて制作佳境の菊地寅祐さんの作品。身体の一部に墨をまとった独特の像を、一心に彫り進めている。

「墨汁を塗っては彫って、塗っては彫って……最初は服を着ていたのがなくなって、肉まで削げてきた。2年生でこのスケールの作品を彫れるのは、立派なものですよ」と、非常勤講師の山口桂志郎先生。彫刻科では電動工具など危険を伴う器具を数々使うため、作業時間は朝の9時から夕方7時まで、延長は一切NG。やる気のある学生は、他の授業に出る時間以外はほぼアトリエに籠って作業に勤しんでいるという。

続いて、金属のアトリエへ。半屋外の空間は、まるで町工場だ。さまざまな機械音が響き、火花を散らして作業する様子も見える。

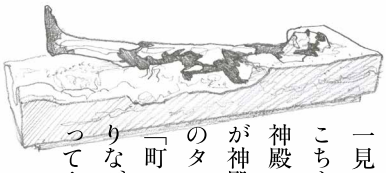
「木や石はもともとが魅力的な塊ですが、金属は単なる鉄の板だったり、パイプだったりする。気持ちを入れるのに、すごく時間がかかるんです。無機的な素材を触りながら、頭の中にあるイメージをパーツに分解し、その部品をつくりながらさらに増殖させて、いかに魅力的な有機物を生み出していくか」。自らもさまざまな素材を駆使し制作を行う大巻伸嗣教授は、金属彫刻の醍醐味をそう語った。

半屋外のアトリエは真冬の寒さがしんしんと身体にしみる。が、「ガスを使ってますからね。溜まると爆発する。100メートルくらいは簡単に吹っ飛びますから」と教授。ここでも爆発か。そのガスバーナーを使い、一心に鉄板に穴を穿つ学生がいた。彼女がつくっているのは鉄製の「赤べこ」。あの、首がユラユラする？「もともとは張り子で、指で押したらつぶれそうなくらい軽いんですが、鉄なら強いのがつくれるかな、強い赤べこなら乗れるんじゃないかって」

岩井りとさんがつくっている〝鉄べこ〟は大型犬くらいの大きさ。穿った穴は花や太陽をモチーフにした独自のデザインで、かわいい、とつい手が出そうになるが、「それ、めちゃめちゃ熱いですからね」と。そうでした。安全第一、安全第一。

さらに、自分の「おへそ」を型取りして巨大かつピカピカのオブジェを構成中の学生、その横でアルミの板で高層ビルを構築しようとしている学

彫刻の顔は、どことなく本人に似てくるもの……らしい。自作を前にした学生たちの表情は、不安そうでもあり、晴れ晴れともしており。ちなみに、藝大でつくった作品は「どんなに大きくても持ち帰る」が基本だそうです。



木彫人物像

生は「高層ビルは構造物なのに、ペラペラに薄く見えるときがある。それを、自分が日常的に抱えている不安と絡めて表現したくて」と話した。作品のひとつひとつが制作者の身体性や心象風景と結びついていて、それぞれ、実に興味深い。

「いきなり想像上の何かを具体的な形にすることは難しいですから、自分の身体の中で感じるものの中からイメージを生み出すんだと思います。そして、彫刻をつくることは、やっぱり身体で覚えないと。ものを動かしたり、立てたり、その過程を、安全面も含めてきちんと体得していくのが大学での学びなんです」(大巻教授)

最後に訪れたのは、石彫のアトリエ。ここにも一見では正体を掴みきれない作品があちこちに。こちらで削り出されているのは、小型のギリシャ神殿のような構造物の中に壺が鎮座する彫刻。「外が神殿で、中にあるのがビルの上に乗っている水のタンクのようです」とのことだが……。

「町の美観を意識してギリシャ様式の建物をつくりながら、一方で横道に入ると雑多な住宅街があって……実用的なものが、美観に関係なく存在していたりする、そういうところから発想しました」と、制作者・桐原由利衣さん。石だけに、ずっしりとした重量感。ざっと200キロはあるとのことだが、これはまだまだ小型のほうらしい。

「卒業制作は2トンまで。でないと、フォークリフトで動かせないので。倒したら大変ですよ。床が割れたり、壁に穴が開いたりして学校から叱られる」とは、石彫作品を数々手がける原真一教授(作品でなく校舎の心配をするあたり、リアル)。

小型のモアイ像のような立像を仕上げようとしている男子学生もいた。首には蝶ネクタイを結んだ父ちゃん坊やふうで、妙に愛嬌がある。

「石がいい感じだったので……そこに自分の好きな、オカルトチックな要素とかをいろいろ詰め込んで……未熟児とか……まあ、自分も未熟なわけで……後付けですけど(笑)」とボソボソと語る渋井知輝さん。像の味は、作者の味か。

しかし、質量のあるものを生み出すのって、つくづく大変だ。8週間なら8週間、ひとつのものに向き合って、途中で嫌になったりしないのだろうか? と問うと「なりますよ」と林教授。

「僕は学生の頃、ひとつのものを長時間やれない人間だったんです。で、考えついたのは、個の大作をつくるんじゃなくて、いくつかの小さなものの集合で作品が成立するっていう方法」(林)

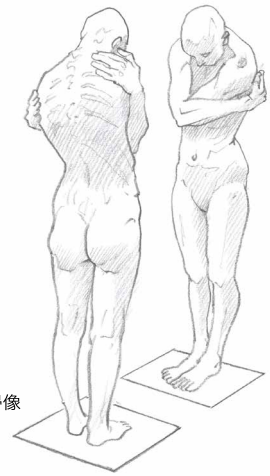
「僕は、嫌になったら放ったらかしますね。実は2007年からずっと彫ってる作品があるんですが、13年かかってようやく形になってきました。このくらいたつと、どうでもよくなるよね(笑)。最初に何をつくろうとしたかも覚えてない」(原)

わははは、と笑いあう両教授。このおおらかな心も、彫刻科(家)の身体性であるということか。

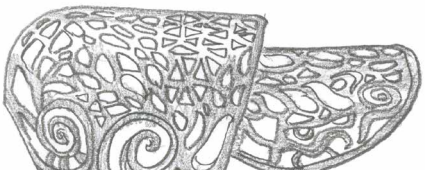
＊

年が明け、いよいよ始まった成果展。初日午前中は、教授陣による全作品講評ツアーだ。司会進行は、彫刻のほか幅広い作品を手がけ、国際展でも活躍する現代美術家、小谷元彦准教授。緊張の面持ちの学生たちの後に、取材班も続く。

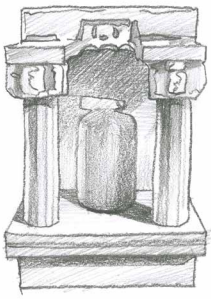
各アトリエで見た作品が、キャプションをつけてそれぞれの場所に鎮座している。墨塗りの木彫人体像は、なんと半身がコンクリートに埋められて完成していた。「僕がつくったものじゃなくて、



対の裸婦像



鉄べこ



誰かがつくったものとしてみてもらいたくて」と作者の菊地さん。ソファの裸婦像もニーナの頭も、アルミの高層ビルも鉄の赤べこも、完成品として存在感を発揮している。

「このアクションが生まれた意味は?」「なぜこの場所に置いたの?」。教授陣から投げかけられる質問に、学生たちは作者として答える。あのファニーな石像をつくった渋井さん、「僕はまだ……作品をつくるとか……リアリティがもてていなくて、何を表現したいのか自問自答してて……」と作品の前でウロウロしながら解説を繰り出すと、「皆に向かって言って! 与えられた場で挑戦する、それがプラクティスだよ」と激励の声が飛ぶ。

教授陣からの質問で多かったのは、「これはどこでフィニッシュするの?」というもの。つまり、この時点で作品を完成とするのか。例の「神殿の中の水のタンク」(作品名《outer module》)には、とくに質問が集中した。「僕はこれで手を引いてもいいと思う」「えー、そう? 僕はやっぱりもうちょっと……」「あなたならどこから手を入れる?」「やっぱり柱じゃないですか」「いや、俺ならここだな」と、教授陣、いつしか侃々諤々の議論を繰り広げている。これはやはり完成に時間のかかる彫刻だから? と素人頭で考えたが、小谷准教授によると、彫刻には「手が動かなくなる瞬間が、いつか必ず訪れる」のだという。

「『これ以上は、ないな』と止まる、作者だけにわかる決めどころみたいなのがあって……。それを感じるにも、結局は経験しかないんですよね。だから、客観的に自分自身を突き放して見るのは、大事な作業だと思います。自分にできることを見極めるのも大事だし、同時に、若いんだから、自分の可能性だけに閉じていないで、彫刻だけでなく、もっとぜんぜん違うことをやってみるとか。若さの特権はそこにあると思うので」

すぐには見つからない。石にしても木にしても金属にしても、身体ごとぶつかって模索するしかないのだと、教室を回りながら林教授も言っていた。つくって、迷って、彫刻家としての身体能力を上げ、スケールを広げていく。遠大なマラソンのスタートラインに、学生たちは立ったばかり。作品は、きっと心の記念碑になるだろう。いずれ2トンを、10メートルをはるかに超える大作をつくるようになっても、今日の日が原点なのだ。

3時間目 「伝統をつなぐ筋力」

音楽学部邦楽科
日本舞踊専攻・
能楽(宝生流)専攻

さてさて、トリは音楽学部。音楽で身体を使うって、歌と演奏以外に何かあるの? と思うあなたは、私と同じド素人(失礼)。あるんですよ、ちゃんと。しかも日本伝統の玄人芸を磨く科が!

ひとつは、邦楽科の日本舞踊専攻。藝大広しといえども、舞踊を学ぶ科はここひとつ。意外にも本科としての設立は1994年と新しく、それまでは邦楽科の副科として存在していたという。

板間の教室に集まってきたのは、学部生12名、大学院生2名。当然とはいえ全員着物姿、そして教室に入る際、扇子を置いて手をつき「おはようございます」と挨拶するのは、授業というよりザ・稽古場の空気。学生たちの礼儀正しさに「いいなぁ……僕の学科じゃ考えられない」と涙ぐむ編集長F教授に微笑みかけるのは、露木雅彌准教授。花柳輔太朗の名で師範、演出家としても活躍する、現役の日本舞踊家である。

まずは1年生による「岸の柳」。両国・柳橋の芸者衆が船に乗って隅田川をゆく、夏の風情を綴

日本舞踊

った長唄に合わせ、女性5人が踊る。

カセットデッキ（クラシカル！）から流れ出す粋な三味線に合わせて踊りが始まると、いつにも増しての別世界感。取材というよりも、まるでお座敷で見物させていただいているような雰囲気だ。お酒がほしい（ダメ）。

しかし、指導は厳格そのもの。「はい、決める。そこ決める。足と身体が合ってないよ。行き先決めてから出るんだよ。ちゃんと目標をつくる」と、一挙手一投足に先生の声が飛ぶ。

「てん、とん、ちゃん……年の頃なら十七、八。芸者さんだから、ちょっと色っぽく、身体は柔らかく。明るくね。楽しそうに。『もし、一杯どう？』『私にもちょうだい。（飲み干す動作）ああ、酔っ払っちゃった……』」

先生がいちばん初々しく、乙女らしい！　続いて登場した2年生男子が舞うのは「北州」。新春に華やぐ吉原の様子を、侍、商人、馬子（荷役人）など複数のキャラクターを踊り分けつつ表現する演目だ。衣装も装置もない中、目の前にいかにリアルな風景を浮かばせるか。ここでも「明るく」、そして「大きく」と、先生が声をかける。

「初買だよ？　お正月、今年はじめて遊郭に行くんだから、もっとうれしそうじゃないと。下向かない。下向くと陰気になるよ」

この若さで艶や色香を表現しようとするのだから、学生たちはそりゃあ大変。しかし皆、当たり前だけど身体がよく動く！　柔和だけれども、かなりの体幹を要する芸と見ました。

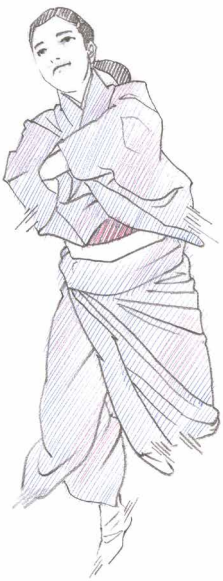
「バーッと汗がほとばしるような踊りもありますよ。体幹？　そうですねぇ……皆さん、ちょっと立って。右のかかとを爪先につけて、まっすぐ座って、そこから背中まっすぐにしたまま、5センチずつ身体を上げてみましょう」

えーと、この姿勢で（グラグラ）5センチ……先生、上半身が鉛のように重くて上がりません！

「アハハ。小さい頃からやってると、普通の人が使わない筋肉を使いますから」

還暦を迎えなんとする先生も、学生たちもスッ、スッと苦もなく身体が上がる。公共放送は筋肉体操より日本舞踊をやるべきですよね……。

「最近は和室がなくなって、皆、椅子の生活ですからね。でも、畳の上を歩いて襖を開けるとか、正座して



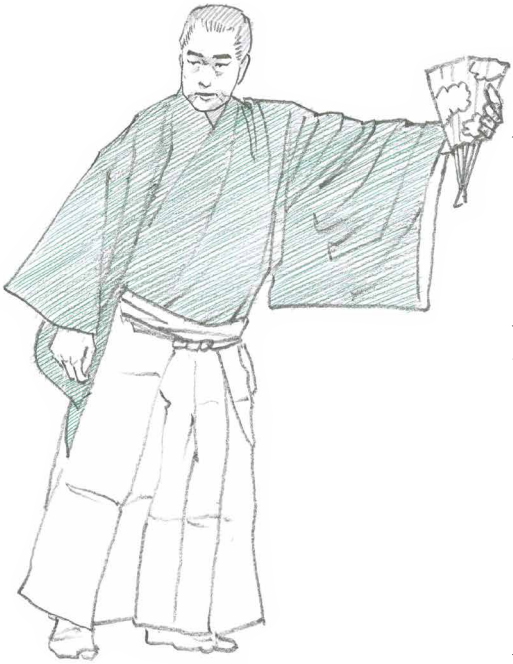
藝大で数々授業を見学して、（比喩でなく）汗をかく学生を見たのははじめてかも。礼儀作法も稽古のうちなのが、何とも清々しい。

手をついてお辞儀をするとか、そういうことを小さい頃に一度はやったほうがいいと思うんです。そういうことを論文のテーマにしている学生もいますよ」

最後は、修了演奏会を控えた大学院2年生による「流星」。男と女、雷神と人間を早変わりで演じる躍動的な演目を舞う身体は、まさに明るく、大きい。せっかくこの国に生まれたんだもの、せめて芯は鍛えておきたいよね……と思わされる、優雅にしてパワフルな授業であった。

＊

いったい、藝大にはいくつ未知の場所があるのか？　音楽学部4号館で、我々はまたひとつ開かずの（開けてくれるけど）扉をたたいた。



そこに広がっていたのは、静謐な能舞台。邦楽科能楽専攻の学生たちの稽古場であり、卒業や修了発表の際には公演会場にもなる。しずしずと現れたのは、袴姿の男子2名、女子1名。藝大で教える観世流、宝生流のうち、彼、彼女らは宝生流を学ぶ。それぞれ幼少時から師匠のもとで修業を積んでおり、藝大では謡（能の台詞にあたる部分）、仕舞（同・舞の部分）を武田孝史教授に学ぶ。武田教授も第一線で活躍する能楽師だ。

「『岩船』をお願いいたします」と最初に舞台に上がったのは、1年生の山下空さん。祖父の舞台に憧れ5歳で初舞台を踏んだ彼は、天からの宝物を帝に献上する船の景をシテ（主役）として謡う。

「宝をよする波の鼓……」

若々しい！　耳にビリビリくるほどの大きな声で、まさに全力だ。対し、地謡（物語の地の文にあたる部分）を担う武田教授は、渋みの効いたビブラート（と言っていいのか）で、これぞ伝統芸能の声音を響かせる。素人には非日常的な音声であるはずなのに、場の空気をキリリと引き締めつつ、聴けば聴くほど心に沁み入るのは、やはり1300年の歴史のなせる技か。ともに謡いながら、教授は山下さんの位置や動き、声の調子を細かく整え、山下さんは「はい！」と機敏に応対する。

続いて、同じく1年生の鶴田航己さん。山下さんとは子方（子役）の頃から同じ舞台に立ってきた彼は、安達ヶ原の鬼女伝説に題を取った「黒塚」に挑んだ。シテを鶴田さん、地謡を教授。瑞々しい声を乗せた身体が、滑るように動く。日本舞踊の柔らかな動きとはまた違う、直線的な平行移動で、人ならざる者の凄みを醸し出している。

学生と教授の声、動きを見比べると、後者のほうがより我々にとっては「馴染み」なのが面白いところ。それもそのはず、素人は、生の舞台やテレビの劇場中継を通して、完成された芸しか観たことがないからだ（スポーツだって、オリンピッ

能楽

能舞台の鏡板に描かれる松は通常、老松だが、藝大の舞台のそれは緑の葉がまだ若い。これからますます茂っていくように、との願いを込めて日本画科のOB・松野秀世氏が描いたもの。

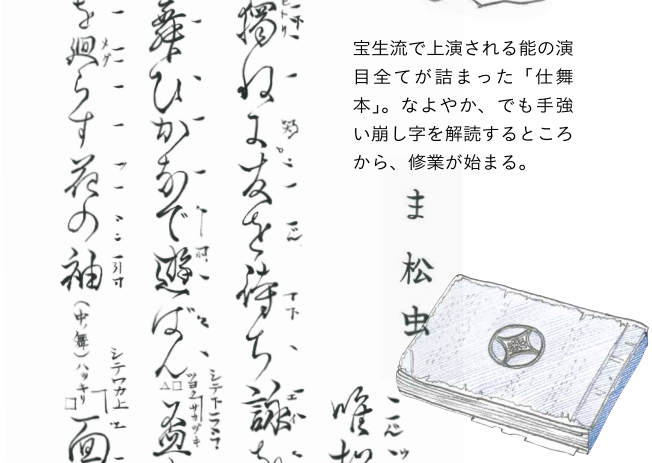
ク選手の体操演技は知っていても、高校生の全国大会を目にすることはあまりない）。錬成途中の芸を眺めるのは、つくづく貴重な体験といえる。

続いて、3年生の植村宙さん。女性の能楽も、実は初体験。「松虫」のシテ、亡霊が消え去る際の幽玄な仕舞に取り組む。かつては男性のみが演じていた能楽に女性が加わるようになったのは、明治以降。現在は多くの女性能楽師が舞台で大役を務めている。性別にかかわらず、一心に芸に専心する姿勢は凛々しく、頼もしい。

「どうでしたか？」。舞台を下りた武田教授は、厳格な師匠の顔から一気に柔和な表情に。

「声、すごいでしょ。若い頃はとにかく一生懸命謡い込んで、男子なんかだと耳が痛くなるくらいでちょうどいいんですよ。そこからどんどん削ぎ落とされて落ち着いてくるので。声よりは身体のほうが先に出来上がりますね。ただそれが、いわゆる能の型に落ち着くには、やっぱり積み重ねが必要。構えも女物、老人、鬼人などそれぞれ違うので、都度、身につけなくてはなりませんから」

迷うのは「今、この子にこれを伝えていいのか？」ということ。大学で教え、学ぶ間の関係とはいえ、弟子の成長、その習熟具合に合った指導を行うのが、師匠の役割であるからだ。実際、65歳の教授自身も、まだ自身の師匠から教わっていない〝最奥〟と呼ばれる演目があるという。



宝生流で上演される能の演目全てが詰まった「仕舞本」。なよやか、でも手強い崩し字を解読するところから、修業が始まる。

「いわゆる心技体でいえば、心が大事な曲。80代の師匠に『先生、そろそろお稽古を』とお願いしたら、『そういうのは今までちゃんと修業していたら、時が来ればできるんだよ』と言われました。能楽師としての心技体がそろうのは、僕はだいたい、55から65歳くらいまでの10年じゃないかと思ってます。僕はこれから落ちる一方（笑）。でも、若い人はそれぞれ目標をもってくれるといいですね。指導を待っているだけでは大成しない。玄人を目指すのなら、何も言われないからいいと思ったらおしまいだよ、と」

人生100年時代、花が咲くのはその半ばからというのは、何ともいい話ではないだろうか。それまでは喉を鍛え、型を身につけ、ひたすら励む。伝統はその身体に、そっと、しかし確かに、大輪の花の種をまくのだ。

お知らせ

今後の催しや大学のさまざまな取り組みを紹介

左：入り口には日比野克彦教授がデザインしたロゴが。右下：東京藝大オープンアーカイブ。取材時は彫刻や映像など11作品を展示。

卒業・修了作品の展示も取手に新スペース「VIVA」誕生

昨年12月、JR取手駅直結のアトレ取手（3月26日にボックスヒル取手から改称）4階に、藝大と取手市、JR、アトレの協業により、複合文化交流施設「たいけん美じゅつ場」がオープンしました。「VIVA」という愛称がつけられたスペースは、アトレの1フロアをまるごと使用していて思いのほか広々としています。なかでも注目すべきは、藝大生の卒業・修了作品を展示する「東京藝大オープンアーカイブ」。これまで大学が買い上げてきた作品の中から選び、年に1～2回入れ替え。収蔵庫の開放ということで、作品を輸送用パレットに載せたり、暗い室内でスポットライトを当てたりとユニークな展示になっています。

「今後はこれらの作品について市民の方々と調査・研究も行っていきます」とは、取手アートプロジェクトの五十殿（おむか）彩子さん。

またそのほかにもデッサン体験などが時折開催される開放的な「VIVAパーク」、多様な工具がそろう「工作室」、アートと旅の本が集まる「大人の休日倶楽部ライブラリー」、市の貸しギャラリー「とりでアートギャラリー」などアートをさまざまな形で楽しめる施設が充実。アートを介して人々が交流するハブとして、今後イベントなども開催される予定です。

VIVAパーク、大人の休日倶楽部ライブラリーは10:00～21:00。とりでアートギャラリー、工作室、ラーニングルームは19:00まで。東京藝大オープンアーカイブは10:30～11:30、13:30～15:00、16:00～18:00のみオープン。一部木曜休み。

「I LOVE YOU」プロジェクト始動 ウェブサイトもオープン

東京2020オリパラ大会を契機に、社会に芸術の役割や新しい可能性を示さんと、「芸術は人を愛する」をキーワードに立ち上がった「東京藝大『I LOVE YOU』プロジェクト2020」。昨年学内において2020万円の予算で企画を公募したところ、100件の申請が集まり、採択された49件それぞれに最大20万円、研究室の場合は最大100万円の助成金が支給されました。

大学として行う11件の中核企画と合わせ全60のプログラムは、展覧会や演奏会、上演など多岐にわたり、今年7～9月をコア期間として年間を通じて実施予定。各プログラムのイベント情報やレポート記事が掲載されるウェブサイトもぜひチェックを。

こちらのロゴも日比野教授がデザイン。「芸術は人を愛する」という言葉は、人が芸術をつくるのではなく、芸術が人を生み出すという意識から。ウェブサイトはこちら▼

台湾原住民パワー！ TURN in TAIWAN

「オーホイヨ～！」。響きわたる朗々とした歌声。昨年12月7日、上野校地で「TURN in TAIWAN」のプレシンポジウムが開催されました。TURNは、背景や習慣の違いを超えた多様な人々の出会いによる相互作用を、表現として生み出すプロジェクトです。これまでに海外では南米や東欧で展開してきましたが、2020年は初めてアジア、台湾で開催することとなりました。

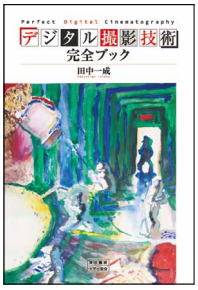
この日は、映画『太陽の子』（原題『太陽的孩子』）のモデルとなったSumi Dongi氏をはじめとする台湾側アーティストが来日し、日本側アーティストとともにキックオフを行いました。「TURN in TAIWAN」は台湾東海岸の原住民コミュニティで実施、その成果は夏に大学美術館で開催される『TURN on the EARTH』で紹介される予定です。

ソトとウチをつなぐ「出島」 藝大アートプラザ

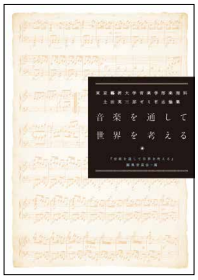
2019年9月に開催された『藝大もののけ祭り 百鬼夜行展』の様子

藝大の敷地内で作品を購入できる藝大アートプラザでは、さまざまな企画展も開催中。3月20日～4月19日には花をテーマにした『花と蕾展』、4月24日～5月31日には昨年好評を博した猫がテーマの企画展第2弾『藝大の猫展2』、6月6～28日には油画専攻による企画展、7月23日～8月30日には大学美術館およびパラリンピック連動企画『アールブリュット展』、9月4日～10月11日には浮世絵プロジェクト連動企画『NIPPON展』の開催を予定しています。

デジタル撮影と音楽研究のいま 藝大出版会の新刊



『デジタル撮影技術完全ブック』
3000円＋税



『音楽を通して世界を考える
―東京藝術大学音楽学部楽理科
土田英三郎ゼミ有志論集―』
5600円＋税

藝大出版会では新たに2タイトルを出版しました。『デジタル撮影技術完全ブック』は、大学院映像研究科・田中一成教授による、デジタル撮影技術とライティングを中心に、基礎から実践までを網羅した一冊。撮影の基礎技術である色温度やレンズの役割に始まり、映像処理の構造なども系統的にわかりやすく解説しています。

『音楽を通して世界を考える』は、音楽学部楽理科・土田英三郎教授のゼミにゆかりのある研究者総勢33名による論文集。国内外で活躍する土田ゼミ出身研究者たちの最新の研究成果をまとめた、音楽研究の〝いま〟がわかる一冊です。

藝大出版会の書籍は、藝大アートプラザでも販売中。最新情報は公式Twitter（@GeidaiPress）で。

大学美術館（上野）の展覧会

本館

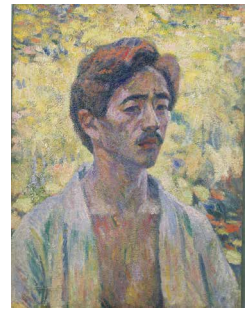
御即位記念特別展 雅楽の美
4月4日～5月31日

展示予定の作品

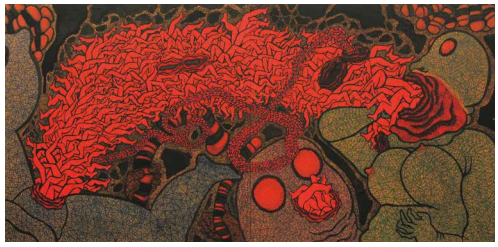
《太鼓》安政2（1855）年
宮内庁三の丸尚蔵館（通期展示）

藝大コレクション展2020
―藝大年代記（クロニクル）
6月13日～7月12日

上村松園《序の舞》1936
（昭和11）年 重要文化財


萬鉄五郎《自画像》
1912（明治45）年

特別展「あるがままのアート
―人知れず表現し続ける者たち―」
7月23日～9月6日


鮴万里絵《泥の中のメメントモリ》
2009年

TURN on the EARTH
7月23日～9月6日

大学美術館　本館（設計：六角鬼丈）

2020台東区コレクション展
9月26日～10月25日

世界のうるし ―装飾と造形―
9月26日～10月25日

陳列館

Alter-narratives
―ありえたかもしれない物語―
3月24日～4月7日
（4月開催へ変更、会期検討中）

日本画第二研究室
素描展
5月8～18日

保存修復彫刻研究室
研究報告発表展
5月22～26日

三美大交流展

「つながる糸・ひろがる布」
6月4～12日（予定）

現代アートの保存と継承（仮称）
6月20～28日

第16回Docomomo国際会議
2020東京～みんなのMoMo
近現代建築の魅力をわかちあおう
9月12～13日

「先端芸術2020／アペラシオン
APPARATION」
―先端芸術表現科20周年記念展―
9月18日～10月4日

正木記念館

平櫛田中記念室開室
―新収蔵品公開・大学史史料展示―
4月4～19日

玄と色
6月6～11日

奏楽堂（上野）の演奏会

藝大フィル定期第397回
新卒業生紹介演奏会
4月24日18時30分

◎新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、本欄記載の展覧会・演奏会が変更または中止になる可能性があります。お出かけの際は左頁下段の問い合わせ先にご確認ください。

２１００円

モーニング・コンサート第１回
４月30日11時
前売１０００円　当日１５００円

モーニング・コンサート第２回
５月14日11時
前売１０００円　当日１５００円

モーニング・コンサート第３回
５月21日11時
前売１０００円　当日１５００円

藝大フィル定期第３９８回
５月29日19時
３０００円

創造の杜
６月５日19時
３０００円

藝大チェンバーオケ定期第35回
６月７日15時
１６００円

モーニング・コンサート第４回
６月11日11時
前売１０００円　当日１５００円

シンフォニーオケ定期第61回
（藝大定期第３９９回）
６月11日19時
１６００円

モーニング・コンサート第５回
６月18日11時
前売１０００円　当日１５００円

藝大第九
６月28日15時
全席指定
Ｓ席５０００円

ウィンドオケ定期第89回
７月１日19時
一般１６００円
高校生以下５００円

モーニング・コンサート第６回
７月２日11時
前売１０００円　当日１５００円

藝大とあそぼう
７月４日14時
高校生以上１０００円
小中学生５００円
未就学児無料
３歳未満入場不可

管打楽器シリーズ
７月９日19時
２０００円

モーニング・コンサート第７回
７月16日11時
前売１０００円　当日１５００円

モーニング・コンサート第８回
７月30日11時
前売１０００円　当日１５００円

和楽の美
８月１日15時
全席指定
Ｓ席５０００円
Ａ席４０００円
バルコニー席４０００円

モーニング・コンサート第９回
８月27日11時
前売１０００円
当日１５００円

藝大プロジェクト２０２０
ベートーヴェン企画
８月30日15時
３０００円

モーニング・コンサート第10回
９月10日11時
前売１０００円
当日１５００円

ジャズin藝大２０２０
９月12日15時
全席指定
Ｓ席５０００円
バルコニー席４０００円

＊展覧会・演奏会の名称、会期・日時などが変更になる場合があります。最新情報は、東京藝術大学公式ウェブサイト（https://www.geidai.ac.jp/）をご覧ください。

＊展覧会についてのお問い合わせ
東京藝術大学大学美術館
☎０３-５７７７-８６００
（ハローダイヤル）

＊演奏会についてのお問い合わせ
東京藝術大学演奏藝術センター
☎０５０-５５２５-２３００

＊演奏会チケットの取り扱い
ヴォートル・チケットセンター
☎０３-５３５５-１２８０
チケットぴあ
☎０５７０-０２-９９９９
藝大アートプラザ（店頭販売のみ）
☎０５０-５５２５-２１０２
東京文化会館チケットサービス
☎０３-５６８５-０６５０
イープラス
https://eplus.jp/

◎先号で掲載した東京減点女子医科大学はアートプロジェクトとして想定した架空の大学です。
誤解ないようお願い致します。

＊1：お申し込みはインターネット、郵送もしくはFAXの書面、上野キャンパスの窓口のいずれかでできます。＊2：インターネットでお申し込みの場合、クレジットカード決済もしくは銀行振込でご入金いただけます。＊3：承諾された方が対象です。＊4：累計30万円以上の寄附をされた方が対象です。＊5：累計100万円以上の寄附をされた方のうち、承諾された方が対象です。＊6：大学美術館の展覧会や、奏楽堂での演奏会などに、累計30万円以上寄附された方々を可能な限りご招待します。

藝大基金のウェブサイトへはこちらから☞
☎050-5525-2400（藝大基金事務局）

藝大基金 検索

○藝大基金寄附者ご芳名

東京藝術大学基金（藝大基金）へ温かいご支援を賜りました皆様に、深謝申し上げます。
本号では、2019年7月から12月までに寄附の申し込みをされた皆様を
掲載させていただきます(掲載をご承諾された方のみ)。

［個人の皆様］

布施武司様　100万円
安藤正夫様　30万円
岩城修様　30万円
眞壁幹夫様　30万円
島根恵様　20万円
吉岡千賀子様　13万円
佐野一義様　11万円
飯島典光様　10万円
磯部理香様　10万円
児島百代様　10万円
汐澤安彦様　10万円
島根育様　10万円
島根朋史様　10万円
西田寛子様　10万円
野見山暁治様　10万円
藤塚光慶様　10万円
矢沼豊様　10万円
山本清様　10万円
岩崎洋一様　5万円
菅春江様　5万円
杉村佳代子様　5万円
中島良能様　5万円
廣田和美様　5万円
細川舜二様　5万円
八重野範夫様　5万円
吉澤文五郎様　5万円
金井妙智様　3万円
金澤初生様　3万円
高島肇久様　3万円
後上友美様　2万円
陣内尚子様　2万円
藤本昌志様　2万円
由井勝・耀子様　2万円
坂入健司様　1万円 1111円
石黒秀子様　1万円
磯貝紀枝様　1万円
今井もなみ様　1万円
上田武夫様　1万円
上村浩子様　1万円
及部保雄様　1万円
木村浩様　1万円
釘宮悦子様　1万円
栗原詩子様　1万円
後藤えま様　1万円
小林市子様　1万円
澤田及子様　1万円
鈴木勉様　1万円
鈴木俊雄様　1万円
高木早苗様　1万円
武内園子様　1万円
千葉真知子様　1万円
津本幸司様　1万円
永川澄子様　1万円
永坂友康様　1万円
中谷茂次様　1万円
中村篤様　1万円
新山明子様　1万円
野崎晃平様　1万円
平井佳樹様　1万円
平山敬二様　1万円
藤川真奈美様　1万円
舩山隆様　1万円
本多正和様　1万円
松前浩子様　1万円
矢田藤子様　1万円
矢部聡様　1万円
渡辺久恵様　1万円
天野千恵様　5000円
蟻川隆正様　5000円
小倉八重子様　5000円
夏山繁様　5000円
山本健様　5000円
峠聡美様　3000円
高橋正行様　3000円
中尾眞佐則様　3000円
向井利行様　3000円
矢崎明子様　3000円
滝田俊彦様　2000円
滝田洋子様　2000円
青山夏実様
揚原祥子様
有坂恵美子様
石部雄紀様
稲垣実様
上田奈穂様
牛田尚様
遠藤義明様
岡山芳子様
小栗茂様
小美濃久乃様
神戸麻美子様
木内禮智様
京谷栄治様
久下有貴様
日下文葉様
小寺秀仁様
小宮里美様
佐久間京子様
佐怒賀悦子様
清水晴雄様
志村義和様
宿輪哲也様
杉山章様
酒々井夏子様
世川勇様
髙橋和歌子様
武市茂様
竹内清二様
武見由美子様
谷珠美様
塚田健一様・沙羅様
戸塚千瀬子様
戸塚亮一様
中村茂幸様
野島やすゑ様
長谷川芳彦様
塙サト様
早川圭子様
本多佐保美様
増子佳世様
松尾葉子様
松延瑞穂様
三浦尚之様
峯佳代子様
宮城玲子様
薬本武則様
吉村稔子様
渡邉五大様

［法人の皆様］

株式会社平成建設様　300万円
山田産業株式会社様　200万円
花王株式会社様　100万円
公益財団法人花王芸術・科学財団様　100万円
株式会社聖ルカレジデンス様　20万円
有限会社ひまわり様　10万円
ソフィア株式会社 川崎知様　1万円
長唄女子東音会様　1万円
株式会社 IKI 取締役 青柳正規様
株式会社 IKI 取締役 三橋一弘様
株式会社エイワ建設　代表取締役　杉江厚詩様
株式会社 GTM 総研様
大興商事株式会社様
一般財団法人若林暢音楽財団様

○藝大基金のお願い

「藝大基金」は、東京藝術大学の長期的・安定的な財政基盤として、教育研究活動や社会連携活動の一層の発展と、我が国における芸術文化の振興などに資することを目的に設立されました。各種プロジェクトなどの実行と、学生へのさらに充実した支援体制を築くため、広く地域社会や企業などの皆様からご寄附を募っております。藝大基金の趣旨にご理解をいただき、ご支援を賜りますようよろしくお願いします。